

萬葉に於て日本的感情を見る (十二)

東京女子高等師範學校教授

石 井 庄 司

九、高朗健全な笑

天の岩戸の神話の中に、朗かな笑があつたやうに、わが國民性の一には高朗健全な笑の情が含まれて居るのであります。萬葉集の歌の中にも、さういふ明朗快活な感情をいくつか窺ふことが出来るのでありますが、これはつまり「わらべ心」に共通するところのものであります。

萬葉集卷十六は由縁ある歌並に雑歌となつて居りました、この中に朗らかな笑を伴つた歌が幾首か出て居ります。なほ他の卷の歌にも澤山明るい感情の見られるのがあります。まづ卷十六から引いてみませう。

勝間田の池は我知る蓮なししか言ふ君が鬚なきがごこ
これはある婦人の歌であります。新田部親王さいふ方が奈良平城の都にお出ましになり、そこにあつた勝間田の池を御覽になりました、深く御心になつたやうであります。さうして池からお歸りになつてから、ある婦人に「勝間

田の池を見てきたが、さても良かつた。池には水が満々こ
湛へてあつて、蓮の花が真盛りで、その美しさは譬へよう
もなかつた」さいふ風に、しきりにお褒めになりました。

ところがその婦人は、勝間田の池の實情をよく知つて居
りまして、勝間田の池にはほんこは蓮のないごこもよく承
知して居りました。そこでこの歌を作りました。

大意をこつて申しますと「お話の勝間田の池には蓮はご
ざいませぬ。私はよく存じて居りますよ。それは、いろい
ろのお話をなさつてゐるあなた様のお顔にお鬚のないの
ご同様でございます」ごなります。面白い歌で、あるごこない
ごこ、何でもかまはず話して居られた新田部親王の御眼の
前に、事實をさらけ出し、高朗な笑が起つたごこ、思はれ
ます。作者の模様も想見されるのであります。

次は「瘦人を嘖り笑ふ歌二首」をこして、左の歌がありま
す。

石麻呂に吾物申す夏瘦に良しいふものぞ鰻むなぎさり召せ
瘦すや瘦すも生やけらばあらむを將はたや將はた鰻むなぎを漁るを河に流
るな

吉田連老むらじいふ人がありまして、字を石麻呂いひましました。この人は生れつき身體が弱くて大變瘦せてゐました。ごんなに澤山たべても肥えてきません。まるで飢ゑた人のやうであつたさ申します。そこで大伴家持は、からかつたやうなこの歌を詠みました。二首連作であります。

初めの歌の意味は、「石麻呂に私は言ひたいことがある。夏瘦にはよいさいふここであるが、鰻をこつて、せつせこ召し上りなさい」さいふのであります。今も夏の土用の丑には、鰻をたべるのであります。かういふ習慣は古くからあつたものさ考へられます。

第一首は、更に次の歌を得て一層面白くなるのであります。即ち大意は、「ごのやうに瘦せても生きて居れば、その方がよろしからうものを、やはり又鰻をさらうとて、河に入つて流されないうやうになさいさいふので、餘り瘦せて輕いので、河の水に流されるなさいふに至つては、聞く方も言ふ方も思はず笑ひ出したことこ思はれます。一度勸めておいて、またそれを危ぶむさいふこころに、この歌の生命があり、一般の讀者も笑ひ出すことこ思はれます。

同様の歌がまだ外にもあります。

法師等が鬚の剃杭馬そりくひつなぎいたくなく引きそ僧なからかむ
檀越だんごやしかな言ひそね里長さとちぢらが課役かじやくはたらば汝なれもなから
かむ

前の方は、戯にお坊さんを笑つた歌で、法師の鬚の剃杭に馬をつなぎ、ひきく引つ張つたならば、お坊さんは半分になつてしまふであらうさいふ意味。「鬚の剃杭」は、無精鬚の長く伸びてゐるのをいふので、面白い譬であります。後の歌は、前の歌に對して法師等が答へる歌で「檀家方は、そんなにいふものではありません。あなた方だつて里長が來て、課役を無理に負せたならば半分になつてしまふでせう」さいふのであります。法師と檀越と互に負けじ劣らじさ勤めてゐるやうであります。

鼻の先の紅い末摘花すいぢかさいいつたやうな人を嗤つた歌には、かういふのがあります。

佛ほとけ造る眞朱まをほ足らずはみづたまる池田の朝臣あそが鼻の上を穿ほれ

全く子供のやうで、無邪氣な言ひあひであります。ぬばたまの裴太ひだの大黒おほくろ見るごこに臣勢こせの小黒こくろもおもほゆるかも

この歌は、土師宿禰水通さいふ人の作であります。大舍人巨勢朝臣豊人さいふ人こ、巨勢裴太朝臣さいふ二人は、顔の黒いので有名だつたさうであります。そこで水通がい

ふには、飛彈産の大黒を見る度に巨勢小黒のことが思ひ出されることであるといふ意味であります。「大黒」は「小黒」は、主に馬の毛並のことで、馬を呼ぶ稱であります。が、それを人間にあてたところが面白いのであります。

かういふ具合な歌を見て行きますと、まことにのさかな感がいたします。これは卷十六といふ特殊の作であります。しかし他の卷にも、かういふことが見られるのであります。卷二にある持統天皇と志斐姫との御問答歌をあげてみませう。

否いなこいへこ強しふる志斐しひのが強しひがたりこの頃しひかすてわ
れ戀こひひにけり

否いなこいへこ語ことれ語ことれの詔みことらせこそ志斐しひいはまをせ強しひ語こと
詔みことる

初のは持統天皇の御製でありまして、語はもういやぢやといつても、無理に話してきかせる志斐の無理はなしも、此の頃しばらく聞かないので、また聞きたくになりましたよといふやうな意味を拜します。それに對して、志斐姫はただ黙つて引込んでしまふといふことはせずに、返歌を奉つて申しますには、もうお話を申すのは嫌でございますと申し上げても、もつともつこい仰せられますればこそ私はお話を申し上げたのでございます。それを無理ばなしに仰せられますことは、まことに無理でございますといつて居

ります。まことに機智に富んだ上品な御應答で、君臣の睦しい光景が手にさるやうであります。明朗快活な世界といふべきであります。

なほかゝる例を尋ねるならば卷一にある天武天皇と藤原夫人との御問答歌であります。

我が里さとに大雪おほはらふ降り大原おほはらふの古りにし里に降おらまくは後のち

我が岡おかの龍神おみかみに言ことひて降おらしめし雪ゆきの摧くだしそに散ちり
けむ

天武天皇は、このときは飛鳥の清御原の宮においてでありました。藤原夫人は、父祖の地である大原にお住居になつて居りました。あるとき都には大雪がありましたので、即興的に御製遊ばされ、夫人の御許へお遣はしになつたわけであります。「我が里」に仰せられるのは飛鳥の清御原宮のことであります。こちらの都では大雪が降りました。そなたの住まつてゐる大原の古い里に降るのは、まだ後のことでありませうと仰せられたのであります。

それに對して夫人の御返歌はまた注目すべき御出来榮であります。「龍神」は支那といふ龍神のことで、水や雪や雨のこを掌る神であります。一首の大意は、都では大雪が降りましたさうでございますが、實は私の方の山に住む龍神に言ひつけて降らせました。そのかけらが都の方へ飛んで行つたのでございます。それを「大雪降り」は「降ら

まくは後」なごい仰せられるのは、まごにおかしいごでございませういふやうなごになります。形の上ではなにか反対なきつてゐるやうなごがありますが、寔に琴瑟相和すご申しませうか、打てば響くごよくよくなつた御和樂の御様子が見えるのであります。そこには、まごに明朗快活な雰圍氣が漂うてゐるごを感ずるのであります。ありがたく忝けなき御模様であります。

ごころで、かういふ明朗快活な氣分は、單にかうした問答贈答の作にあるばかりでなく、一首のごごの調の中にも見られるのであります。例へば卷一のはじめにある「中皇命」が紀の温泉にお出になつた時の歌なきはそれでありませう。

わが背子せこは借盧かりほつくらす草かやなくば小松が下の草をからさね

「中皇命」はさういふ方がよくわからず、歌の解釋にもむづかしいごころがありますが、ごにかく「背子」は、一般に女子から男子を呼ぶ親しみの言葉ごしまして、「あなた」ごいふやうな意味にいたしませう。一首の大意は、あなたは今旅先で假の小舎をお建てになつていらつしやいますか、若し屋根をお葺きになる草が足りないやうでしたら、あの小松の下に生えてゐる草をお蒔りなさいませごいふので、まるで幼い子供たちがまごご遊でもしてゐるやうな感が

するご評された方があります。まごにあげない、明るく光景であります。そしてこの歌には「わがせごかりほつくらすかやなくばごまつがしたのかやをからさね」ごいふやうに「カ」の音の繰りかへしの多い歌であります。さういふごころも一種特別の明るい感を起させてゐるやうであります。

あげない明るさごいふやうな言葉を用ひてまゐりまして、話はさうやら再びもこの「わらべ心」に復歸しさうであります。本年一月以來、お話してまゐりました、この貧しい話も一應この邊で打ちきりごさせて戴きます。

まだ／＼申したいごも多いのであります。あごは各位の御研究にまちたいご思ひます。これまでお話してまゐりましたやうに、萬葉集の歌は、決して私ごもの生活から離れたものでなく、却つて身に近々ご親しく感ずる方が多いのであります。わかり易いのであります。註釋書を頼らずに本文に親しむ幾度も繰りかへして讀み浸るやうにして戴けば、自ら發明されるごころが多からうご思ひます。

切に御勉強を祈つて筆を擱きます。(終)